神戸新聞（夕刊）　第45610号　2025年（令和7年）3月13日　木曜日　©神戸新聞社　2025年　（日刊）

2025年（令和7年）
3月13日
木曜日

夕刊　神戸新聞

戸新聞社　〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7　https://www.kobe-np.co.jp　購読・配達お問い合わせ　0120・16・8349　10:00～17:00

スポーツ医療 神戸が「本場」

県立リハビリ中央病院

スポーツに特化した国内指折りの医療施設が神戸市西区にある。兵庫県立リハビリテーション中央病院スポーツ医学診療センター。けがの診断から復帰までをサポートし、荒木大輔センター長(47)は「ワンストップ対応は公立でうちだけ」と語る。その証しとして数々の日本代表選手が訪れている。（有島弘記）

診断から手術、復帰まで一括サポート

リハビリやトレーニングを行うための器具がそろうスポーツ医学診療センター＝神戸市西区曙町

開設は2021年4月。一般的に手術やリハビリなどは別々の機関に行くことになるが、同センターは多様な人材と既存施設の活用で転院を不要にしている。

バレーボールや陸上ホッケーなど日本代表のチームドクターを務める整形外科医らが在籍。手術数は膝の症例を中心に全国トップクラスの年間約800件を数え、術後は西日本最大級のリハビリ室に移る。最新のトレーニング器具などが並び、スポーツ分野に強い理学療法士らが機能回復だけでなく、個々の状態に応じて自主トレーニングのメニューを提供。敷地内にはアリーナを備えた県立障害者スポーツ交流館もあり、球技の選手にはボールを扱うなど実戦的な動きを取り入れて早期復帰に導く。

「復帰に必要なのは外科だけではない」（荒木センター長）と、全国的に珍しいというスポーツ内科も併設する。専門医が貧血や無月経などに対応し、07年の大阪世界陸上女子1万㍍出場の脇田茜さん(37)＝須磨学園高出身＝も管理栄養士として携わり、自身の体験談を交えながら相談に乗っている。

利用者はトップアスリートだけに限らず、部活動に励む中高生やスポーツ愛好家と幅広い。週3日は午後7時まで開院。センターの方針として五輪選手であっても特別扱いせず、異なる立場の人たちが同じ空間でリハビリに励んでいる。

日本代表チーム医師ら、早期回復導く

専属契約を結ぶ荒木大輔さん（中央）を囲む石川祐希選手（左）と高橋藍選手＝2024年1月、イタリア・ミラノ（荒木さん提供）

全国的に珍しい施設群には、総合トレーニングセンターの新設計画もある。荒木センター長は「スポーツ医学の聖地にしたい」と知見を積み重ね、日本をリードする。

バレー主力と専属契約、荒木センター長

世界で10人の国際連盟委員

兵庫県立リハビリテーション中央病院スポーツ医学診療センターでトップを務める荒木大輔さん(47)はバレーボール界で知られた存在だ。石川祐希選手、高橋藍選手、西田有志選手ら男子日本代表の主力と専属契約を結び、サポートを続ける。

神戸市須磨区出身。六甲中・高ではバスケットボールに打ち込んだが、進学した秋田大で「医学部ではデカめ」の身長（179㌢）に目を付けられ、バレー部に入った。神大病院で勤務していた2007年、当時神戸を拠点にした女子の久光製薬（現SAGA久光）の監督、真鍋政義さん(61)＝姫路市出身＝に競技経験を買われ、チームドクターに。真鍋さんが女子の日本代表監督になった09年以降は代表にも携わり、昨夏のパリ五輪では男子代表に帯同した。

18年から石川選手に頼まれ、代表活動以外でも体を見るようになった。日本のエースは世界一の選手になるために食事や睡眠にこだわり、バレー中心の生活を送る。「こちらも最新の医療を提供しようと常に学んでいる」。世界で10人だけという国際バレーボール連盟メディカル委員という肩書が確かな力を物語る。（有島弘記）